

## 第6章 ろう者偉人伝

この章では、歴史上に名を残したろう者たちについて紹介する。ろう者の動きがどのように日本に影響を与えたのか、あまり知られていない歴史にスポットをあてる。なお、これらのろう者については、伊藤政雄著『歴史の中のろう者』(近代出版、1998)に詳しい。

### 6.1 松尾芭蕉の弟子はろう者だった

#### 6.1.1 杉山杉風

松尾芭蕉の弟子として、杉山杉風(さんふう)(1614~1732年)がいたが、杉風は松尾芭蕉の経済的庇護者として知られている。「鯉屋」の屋号で幕府御用の魚問屋を営み豊かな経済力で芭蕉の生活を支えた<sup>1</sup>。彼は幼い頃から病弱の身で、耳も聞こえなかったとも言う。そして、芭蕉の門に入り、俳道にも精励し、20年以上芭蕉に忠実に仕えている<sup>2</sup>。なお、杉山杉風の子孫に、山口智子(女優)がいる。

### 6.2 幕末の藩士らに影響を与えたろう者たち

尊王攘夷論から開国論と日本を揺り動かした幕末といえば、吉田松陰、坂本龍馬、伊藤博文、高杉晋作、西郷隆盛、陸奥宗光、大久保利通、勝海舟などの名前が思い浮かぶ。攘夷尊王論、開国論を唱えた人たちの背景に2人のろう者<sup>3</sup>がいる。谷三山(奈良県)、宇都宮黙霖(広島県)である。彼らのことについて知る人はかなり少ない(地元の人でなければ知らない)。

#### 6.2.1 吉田松陰の実弟杉敏三郎

吉田松陰の弟にろう者がいたことを知る人は少ない。杉敏三郎は生まれたときから耳が聞こえず、容貌は兄の松陰と瓜二つで、才気もよく似ていて、家庭内では筆談や手真似でコミュニケーションしていたといわれている。吉田松陰の著作である『戊午幽室文稿』(1858年)で、杉敏三郎のことについて触れている。

- わが弟・敏三郎は生まれつき聾啞であり、今14歳
- 彼は文字を真似ることは出来るが、結局読み書きは出来ない

しかしながら、吉田家によく出入りしていた乃木希典將軍の実妹であった長谷川いね子によると、松陰の妹が敏三郎の教育を担っていたという。そして、敏三郎は裁縫を生涯の生業としていたのである。

<sup>1</sup><http://www.bashouan.com/pfSanpuu.htm> より一部引用

<sup>2</sup>『江戸時代の聾啞者たち』、伊藤政雄、1998、「歴史の中のろう者」、近代出版、pp111-113 所収

<sup>3</sup>ろう者といっても、厳密は2人とも中途失聴者であるが、コミュニケーションの主なスタイルは筆談であったという。

## 6.2.2 谷三山

儒学者であり、尊王攘夷論の先駆者であった谷三山のことを知る人は少ない。『聾儒谷三山<sup>4</sup>』（大伴茂、1941）が、谷三山について最も詳しい資料であろう。これによると、谷三山は11歳の時、耳が聴こえなくなり、数年後に全聾となったとある。11歳に進行性難聴をわずらい、全聾になったという見方ができる。この書によると、谷三山は筆談にて多くの人との手紙のやりとり、訪問者との会話を交わしている。著名な人間に猪飼敬所<sup>5</sup>、頼山陽<sup>6</sup>、斎藤拙堂<sup>7</sup>、森田節齋<sup>8</sup>、吉田松陰<sup>9</sup>らがいる。彼らとは、すべて筆談で思想を語り合っている。少年時代に失聴しているにもかかわらず、生まれつき知的才能に恵まれていて、新しい情報が全く入らない大和の田舎に暮らし、藩の学問所に集まる知識人にひけをとらず、社会情勢に関する情報を正確にとらえている。その後、三山が30歳になったときに、私塾「興讓館」を開き、多くの人々を受け入れ、詩文、経文、教育、政治など幅広く教えている。当時から、三山は尊皇攘夷の考えから幕府の政策を厳しく批判し、吉田松陰<sup>10</sup>、森田節齋、頼山陽と筆談で延々と論じ合っている。そして、三山は「尊皇攘夷論策」を発表している。三山の先見の明には確かなものがあり、吉田松陰の日記の中に三山のことを「三山翁」とわざわざ「翁」とつけている。どうやら、松陰は三山を尊敬しているようでもある<sup>11</sup>。

## 6.2.3 宇都宮黙霖

宇都宮黙霖という名前から彼は耳が聞こえなかったのだろうということは予想できる。21歳に大病を患い、失聴している。呉市ホームページで、宇都宮黙霖について以下のように紹介している。

明治維新の思想的柱といわれた吉田松陰に深い影響を与えた宇都宮黙霖が、安芸国賀茂郡広村長浜（現・呉市広長浜）で生まれたのは、文政7（1824）年のことだった。維新後の明治27年、来広中の当時の総理大臣・伊藤博文から「先生、先生」と慕われるほどであったが、その功績に反して、宇都宮黙霖の名を知る人は意外と少ない。

（呉市ホームページより引用）

<sup>4</sup> 『聾儒谷三山』、大伴茂、1941、平凡社

<sup>5</sup> 江戸時代後期の大儒学者。津藩士。京の老儒とも呼ばれていた。

<sup>6</sup> 頼山陽（らい・さんよう、1780～1832年）は、江戸時代後期の日本を代表する漢学者で、歴史・文学・美術などのさまざまな分野で活躍

<sup>7</sup> 拙堂は津藩の漢学者であり、広く蘭学などにも目を向けていた。特に中国がアヘン戦争でイギリスに負けたという情報に接してからは、世界情勢と日本の防備について勉強し、彼自身の論説も著している。防備のために財政の苦しい津藩の実情を見て、自分の家禄を返上することを願い出るほどであった。拙堂が収集した世界地理書は60種を超え、当時は入手しにくかったと思われるものもたくさん含まれており、外国を拒絶する攘夷派と、外国ととりあえず手を結ぼうとする和親派の対立が激しさを増す情勢の中で、拙堂は「日本を知るために、世界地理を研究する」という姿勢をくずさず、偏見を持たないよう、研究を続けた。幕末の志士たちのような派手さはなかったものの、日本の将来を真剣に考えた拙堂の心は、決して志士たちに劣るものではなかったと思われる。彼は、明治維新の直前、慶応元年（1865）に69歳でこの世を去り、津の四天王寺に葬られている。

<sup>8</sup> 森田節齋（文化八年～明治元年）は、頼山陽の高弟であり、江戸昌平興にも学んだ学者である。森田は吉田松陰と会う機会があり、松陰は節齋に教えを聞いた後、聾儒谷三山を訪れ、筆談を交わされている。

<sup>9</sup> 明治維新に大きなきっかけを作ったといわれるが、森田節齋に会った後、谷三山と会っている。吉田松陰の弟は聾者であった。

<sup>10</sup> 吉田松陰は森田節齋の紹介で、三山のところへ訪問している。激しい論議がその後の松陰の思想に影響を与えている。

<sup>11</sup> 『聾儒谷三山』、大伴茂、平凡社、昭和11年



宇都宮黙霖

### 吉田松陰に影響を与えた黙霖の手紙

黙霖が15歳のとき、叔父である専徳寺の常諦から『大学』の素読を受け、その才能を開花させた。21歳のときには、大病を患い、命は助かったものの、耳が聞こえなくなった。翌年ごろから、国学研究により勤皇論を唱えるようになり、40余国を回り、多くの漢学者や国学者と交わった。29歳のとき、江戸の老中阿部正弘に誘われて、尊皇の大義を説いた著作集を貸し出している。このためか、安政元（1854）年、31歳のころから、幕府や広島藩に思想犯として追われる身となった。

尊皇倒幕を説いて回る旅を続ける中、萩で吉田松陰の『幽囚録』を読んで感動し、獄中の松陰に手紙を送ったのが文通の始まりであった。松陰は、往復した手紙の余白に、次のように付記している。「右、黙霖は一向宗の僧なり。耳、一向に聞こえず、言舌不分りなれども、志は至って高し、漢文を以って数度の応復これあり候処、終に降参するなり。此の人は、芸、宇土浜（長浜）の産なり」。（呉市ホームページより引用<sup>12)</sup>

このように宇都宮黙霖は勤皇倒幕に傾き、長州藩から九州、関東に至るまで40以上の諸国を巡って勤皇の志士たちと交わっており、久坂玄端、頼三樹三郎、梅田雪浜、僧・月性などと親交を深めつつ、倒幕を促進していた。そして吉田松陰とは『幽囚録』を読んで感動したところから、文通で倒幕を促進している。松陰は黙霖への手紙の中で谷三山のことについても触れている<sup>13)</sup>。当時の吉田松陰は幕府に諫言を申し上げるレベルの水戸学の範囲を出ておらず、そのことを宇都宮黙霖に看破され、松陰が宇都宮黙霖に教えを請うところから、吉田松陰の尊王攘夷は、諫幕から討幕へと転じていくのである。

吉田松陰が日本に与えた影響は計り知れないものがある。吉田松陰の天分のなせる業によるものもあるが、吉田松陰を動かした人たちの中に、谷三山、宇都宮黙霖というろう者がいたということを忘れてはならない。

## 6.3 政治に出たろう者たち

### 6.3.1 横尾義智

横尾義智は旧東頸小黒村で村長を3期12年務めたろう者（1893—1964年）である。全国でも唯一の聾啞の身でありながら村長になったことで、新潟県では有名な人物だったらしい。このことは、当時を生きていたろう者たちにとっては懐かしい話であるが、現代人にとってはどういう人であるのか全く知らないでいた。「昔、ろうあ村長が新潟県にいたらしい」という程度でしかないのである。横尾義智が村長時代に成し遂げた業績を見ると、廃村寸前にあった村を救うために直接政

<sup>12)</sup> 呉市ホームページ ([http://www.city.kure.hiroshima.jp/mitekure/choujin\\_02.html](http://www.city.kure.hiroshima.jp/mitekure/choujin_02.html))

<sup>13)</sup> 『聾啞の学僧 宇都宮黙霖』、伊藤政雄、歴史の中のろうあ者、近代出版、1998、pp176-178

府に赴いて交渉するなどの政治的な手腕を振るっていることが伺える<sup>14</sup>。横尾義智は7人姉弟の末弟であり、その上の姉とともにろう者であった。姉とともに東京盲啞学校（現・筑波大学附属聾学校）で学問を修めている。

横尾義智は図工科に在籍し、絵画について学んだが、地元の小黒村に戻ってからは、安塚銀行（現・第四銀行安塚支店）の取締役、消防団の長などを務めている。そして、彼は小黒村の村長に選出され、3期12年を勤め上げている。議会対応などはすべて筆談であり、横尾義智の奥さん（塩川家から嫁ぐ。聴者であり、当時の長岡ろう学校で手話を学んだという）の手話通訳を必要としなかった。また、議会における資料を徹夜で人数分だけ書き写しを行い、横尾義智村長の助役がその資料を村長に変わって読み上げていた。この情景について、同時の村職員だった人が思い出しながら語っている。そして、横尾義智村長の助役に対する信頼はとても厚かったと思いつき起している。そして、村民からは「おっち<sup>15</sup>村長」と慕われていた。

おっち村長は、村の危機を救ったばかりでなく、村では最初の保育園を作った人でもあり、自分の土地を解放して小学校を作った人でもある。また、当時の村の経済を考え、道路の整備に力を注いでいる。横尾義智邸内にあった「雪室<sup>16</sup>」は、有形文化財（建造物）に登録されている。しかしながら、村長の座を追われることになってしまうのである。日本の敗戦後におけるGHQの公職追放令が交付されたとき、横尾義智もその対象となり、村長を辞職しなければならなくなったのである。村長を退いた後は、ろう者の組織を作るために東西奔走し、現在の全日本ろうあ連盟の設立に力を注いでいる。

横尾義智は、D PRO というろう者のグループ<sup>17</sup>によって偉大な歴史が掘り起こされ、その後、新潟県聴覚障害者協会、安塚町らの協力によって、横尾義智に関わる史跡の保存などが行われた。安塚町は雪だるまの町おこしで有名であるが、「ろうあ村長」としての横尾義智の偉業を忘れない行野地区の老人たちがいる。これらをNPO法人素人芝居大浦安が芝居にしている。芝居の流れの中に横尾義智を偲ぶ場面が描かれている。住民に尊敬されたろうあ村長は過去にも未来にもいないかもしれない。

山村の大浦安村は近々、高江市に吸収合併されるとか。合併しないと村は成り立たないと聞かされたり、合併後は住民の主体性が大切と急に言われても、人々は不安と戸惑いばかり。

しかも、地域の活性化をねらって建設を予定した高級老人ホームは、親会社の補助金不正支出問題で警察の捜査を受けるなど夢は消え去り、お陰で市議会議員選挙に、頼みの議員が落選するとあつては、地域はお先真っ暗。

困惑の中で「あの人がもし生きていたら？」と村人が思いをはせたのは、聾啞の身であつても大浦安村の前身、旧東頸小黒村で戦前戦中を通して村長を務めた故・横尾義智氏のこと。「如己愛人」を座右の銘とした故・横尾村長の実績は、六十年を経た平成の世にも、大浦安村の人々の心から消えてはいなかったようだ。（NPO法人素人芝居大浦安ホームページより一部引用、2005）<sup>18</sup>

<sup>14</sup>『横尾義智』、野呂一、1996、現代思想 1996 年臨時増刊号「ろう文化特集」

<sup>15</sup>おっちは、つんぼでしゃべれないの意

<sup>16</sup>安塚町行野集落 大地主・横尾家の雪室 (<http://www.yukidaruma.or.jp/yukilife/p05.htm>) のホームページで、昭和9年に村長に就いた際、養蚕組合の組合長を兼務している経歴から、雪は、養蚕用で蚕の卵の孵化を抑制・調節することに使われていたほか、蚕の種紙の保存管理の事例（十日町市）もあることから、行野をはじめ旧小黒村でも、何か養蚕にかかわる事業で雪を使うために雪室が使われた可能性があるかとあります。

<sup>17</sup>D PRO：日本手話で話し、ろう文化を共有するろう者を社会にアピールしている啓蒙団体、1993年創立。

<sup>18</sup>NPO法人素人芝居大浦安のホームページ ([http://www.yukidaruma.or.jp/oo-ura\\_yasu/present.htm](http://www.yukidaruma.or.jp/oo-ura_yasu/present.htm))

### 6.3.2 桜井清枝

2001年4月22日に白馬村で村議員選挙が行われ、390もの得票を得て第三位で当選した桜井清江（すみえ、当時55）さんは聴覚障害者<sup>19</sup>である。毎日新聞（2001年5月9日）の記事で、「聴覚障害者の桜井清枝・白馬村議が初議会―手話通訳3人、交代で協力 /長野」<sup>20</sup>という見出しが躍った。

- 手話をコミュニケーションの手段とする聴覚障害者の市町村議員は全国初（全日本ろうあ連盟より）
- 村の法規審査委員会で「村手話通訳者・要約筆記者派遣事業実施要綱」を制定し、県へ手話通訳派遣のあつせんを要請
- 手話通訳は体力的にも激務のため1人が続けて出来るのは15～20分が限度であり、6月定例村議会など日程が長期の場合は大勢の通訳が必要であることが懸念事項（国が認める手話通訳士は県内に17人いるだけで、通訳者の絶対数がかなり不足している）。

議会においては、手話通訳者2名と要約筆記者2名が常に配置されている。聴覚障害議員が生まれるということは、同時に人的コストが発生することになり、財政的な支援が必要になることは、長野県における県議会会議録<sup>21</sup>から明らかである。人的コストがかさむことを承知の上で村議員選挙に立候補し、議員として活躍した桜井さんは、全国のろう者にとって励ましとなる快挙である。手話通訳者と要約筆記者をつけることについて意志を貫いたのは実に見事と言わなければならない。

<sup>19</sup>筑波大学附属聾学校出身。白馬村で同じ聴覚障害者の夫とともにペンション（スキーロッジ経営）を経営している。

<sup>20</sup>毎日新聞ホームページ「ユニバーサロン」<http://www.mainichi.co.jp/universalon/clipping/200105/076.html>

<sup>21</sup>長野県議会ホームページ：会議録抜粋 森田 恒雄（一般質問）平成13年12月12日 (<http://www.pref.nagano.jp/gikai/giji/hatu1312/yousi004.htm>) に掲載

## 第7章 異文化の中のろう文化

### 7.1 ろう文化の定義

「国際コミュニケーション」は、一般に日本と外国との間におけるコミュニケーションを指すが、日本人と在日外国人とのコミュニケーションを取り上げることもできる。異文化同士のコミュニケーションに焦点を置くならば、日本における聴者4、ろう者にも同じ事が言える。聴文化とろう文化におけるコミュニケーションが相当する。「ろう文化」という概念は、日本においては聞き慣れない言葉である。1991年に第11回世界ろう者会議が東京で行われたのを皮切りに「ろう文化」という言葉が使われ始めた。世界各国に、必ずろう者集団があり、ここでは言語としての手話が使用され、またろう文化を共有している(1992、蒔田明嗣)<sup>1</sup>。ここで言う、「ろう文化」を次のように定義したい。言語、価値観、行動、規範、慣習、習慣において、ろう者が共有するものと定義する(1996、木村・市田)<sup>2</sup>。

### 7.2 社会におけるろう者への見えない抑圧

ろう教育の歴史を紐解くと、江戸時代に寺子屋でろう児のために手話で教えたという記録が辛うじて残っている(日本聾唖秘史)。正式に確認されているのは1878年に京都で京都盲唖院が創立されたことがろう教育の始まりとしている(1991、全日本ろうあ連盟)<sup>3</sup>。幕末から明治初期にかけて、吉田松陰らに影響を与えた谷三山、黙霧らは聴覚障害者であり、筆談で教えたという記録が奈良、広島で確認されている(1998、野呂)<sup>4</sup>。当時から、ろう者に対する認識はかなり深かったと思われる。江戸時代にはろう者集団があったと思われるが、それを裏付ける決定的な証拠はまだ見つからない。社会言語学的視点から、盲唖院が創立された時点で既に多くの手話が使われたと言うことを見ると、江戸時代からどこかで手話が使われていたことが容易に推測できる。

教育方法について、1880年にミラノで開催された国際会議で「口話法を全面的に支持する」決議がなされている。そのミラノでの会議は医者が90%を占めており、「ろう」を病理学的にみなしていたために、「口話は正常化への手段」とされてしまったのである。残念ながら、ここにろう者の意見はなかった。ミラノでの決議の影響で、世界中の聾学校で手話法から口話法による教育が主流になっていった(1998、ギー・ブジョボ)<sup>5</sup>。日本でもその例に漏れず、昭和初期に、全国の聾学校で口話法が取り上げられつつも、唯一、大阪市立蟹学校だけが口話法を否定し、手語法を維持した(1983、川渕依子)<sup>6</sup>。口話法によって、ろう者の言語である手話が剥奪され、日本語が強制的に教えられてきた。口話法への移行に危惧感を抱いたろう者、藤本敏文は全国を行脚して、言語とし

<sup>1</sup>蒔田明嗣(1992)、日本におけるマイノリティー・グループとしての聾者集団(月刊人間家族8月号)

<sup>2</sup>木村・市田(1996)、聾文化宣言(現代思想1996年4月臨時増刊号)

<sup>3</sup>全日本ろうあ連盟(1991)、新しい聴覚障害者像を求めて(全日本ろうあ連盟)

<sup>4</sup>野呂一(1998)、Dプロろう者学術研究センターろう歴史学公開講座にて演説

<sup>5</sup>ギー・ブジョボ(1998)、Dプロ・オータムスクール基調講演

<sup>6</sup>川渕依子(1983)、手話は心(全日本ろうあ連盟)

ての手話、ろう文化について説いてまわったものの、それは受け入れられず、大阪市立聾学校のぞく殆どの聾学校が口話法を採用した(1998、筑波大学附属聾学校同窓会)<sup>7</sup>。

戦前に教育を受けたろう者には優秀な人材が多く、手話も日本語も獲得できていた(バイリンガル)が、戦後から昭和末期に教育を受けたろう者は手話も日本語も獲得できないというセミリンガル児を沢山生み出している。奇跡的に日本語を獲得できて、ろう文化を獲得できないろう者も少なくはない(1996、金澤貴之)<sup>8</sup>。ここで起きる問題は、日本語を獲得できて、聴文化のみならず、ろう文化をも獲得できないということである。この反省をもとに、今、聾学校で手話を再導入するところが増えてきている。それまでの50年というブランクはろう者にとっては言語を奪われたという意味で暗黒時代でもあろう。

福祉という言葉が入ってから、障害者ではなかったろう者が障害者になり、ここから目に見えないろう者への社会的抑圧が行われてきた。TV、新聞などが取り上げる「ろう者」は病理的な存在であり、治すべき対象として描かれている(1996、棚田)<sup>9</sup>。日本において、手話による遺言がやると認められるようになり、民法の改正が行われるに至るなど、いろいろな免許、試験、裁判、選挙、雇用など様々な局面で手話者(ろう者)は制度的な差別を受けている(1998、神田)。手話の社会的な地位における問題点の一つに、手話は福祉の手段と考えられていることがある。アメリカでは殆どの大学に手話が開講されているが、日本では英語以外の外国語に冷淡だけでなく、手話はその仲間にも入れてもらえない状態である(1998、神田)<sup>10</sup>。

職場におけるコミュニケーションでもろう者は常に同僚、上司と衝突している。衝突している原因にコミュニケーションのずれがあるということが報告されている(1991、岩淵紀夫)<sup>11</sup>。例えば、「分かる」という日本語を取り上げよう。

聴者 「私の話したこと、分かりましたか。」ろう者 「分かりました。」

聴者が話された事実を認識することがろう者にとって「分かった」のであり、内容は全く分かっていないのである。しかし、ろう者同士の会話になると、話された事実を認識することと、内容を理解することを同じ「分かる」で使い分けることを可能にする。しかし、聴者との会話となると、可能ではなくなる。このようなトラブルが目立つ。「分かる」について社会学的な分析が更に必要になるが、これは他の機会に譲る。

### 7.3 手話と日本語対応手話論争

口話法がピークに達した頃、手話サークルが創立された(1991、全日本聾啞連盟)。当初、ろう者の言語としての手話がそこで教えられてきたが、次第に日本語を母語とする人が手話を覚え、その人が日本語を母語とする人に教えていくという悪循環を産み、そこで日本語に則った手語(日本語対応手話)が形成された。これはろう者にとって分かりにくいものであるが、中途失聴者、難聴者という日本語を母語とするグループにとっては分かりやすく、コミュニケーションの手段として日本語対応手話を好んで使い始めるようになった。日本語対応手話は日本語を母語とするグループにとって覚えやすいものであったことから全国に広まり、ろう者との会話を更に困難なものにした(1996、木村・市田)。

<sup>7</sup>筑波大学附属聾学校同窓会(1998)、藤本敏文(筑波大学附属聾学校同窓会)

<sup>8</sup>金澤貴之(1996) 聴者による、聾者のための学校(現代思想 1996年4月臨時増刊号)

<sup>9</sup>棚田茂(1996)、メディアとろう者(現代思想 1996年4月臨時増刊号)

<sup>10</sup>神田和幸(1998)、手話とはどういう言語か?(月刊言語 1998年4月号)

<sup>11</sup>岩淵紀夫(1991)、自立への条件(日本放送出版会)

ろう者の中で日本語対应手話を使う人が増えてきたが、ろう者(手話者)にとっては日本語対应手話は使いにくく、結果的に日本語対应手話者と同席する場面では意見を言いにくくしている。これは聴者とのコミュニケーションでも日本語を主体としたものであり、日本語が主体の場面では意見がなかなか言えなくなってしまうのと同じであろう。

しかし、1991年に東京で開催された第11回世界ろう者会議はそれを見事に覆すほどの内容であった。「ろう者の母語は手話である」というスローガンのもとに、音声言語に則った手話よりもろう者自身の自然言語としての手話が前面に押し出されていた(1992、世界ろう者会議決議)<sup>12</sup>。ここに、自然言語としての手話と日本語対应手話における「手話」という用語をめぐる、ろう者、難聴者・中途失聴者・手話学習者との間で論争が起きた。

日本語対应手話を「手話」と信じてきた人たちは、ろう者が日常使う手話も日本語対应手話も同じ「手話」という枠にはめたがる傾向がある(1996、長谷川)<sup>13</sup>。世界各国の手話研究によると、日本語対应手話と呼ばれるものは「手話」という枠に当てはまらず、音声言語としての日本語の枠に入るとしている(1998、神田)。「手話」に関する論争は10年近く続き、ようやく、ろう者が日常的に使う手話と難聴者・中途失聴者・手話学習者が使う日本語対应手話は全く別のものであることが認識されるようになった(1999、斎藤)<sup>14</sup>。

## 7.4 抑圧から解放へ

1989年、アメリカで大きな事件が起きた。「Deaf President Now!」運動である。「ギャローデット大学学長にろう者を!」という運動であり、ろう者のための総合大学にも関わらず、ろう者の学長が選出されないとする不満と、ろう者のアイデンティティが一番爆発したときでもあった(1994、A. ソロモン)。これは黒人の公民権運動に似ている。「ニューヨークでもっとも古いろう学校のあるレキシントン・センターで行われている抗議運動は、ろう者の公民権運動の歴史の中で重要な出来事である。」という書き出しに始まるNew York Times Magazineに寄稿された論文のタイトルは「Deaf is beautiful.」である(1994、A. ソロモン)<sup>15</sup>。「Black is beautiful.」というフレーズを借用して作られたフレーズである。黒人に言えることはろう者にも言えるという意味でもある。ろう者の公民権運動はギャローデット大学学長をめぐる運動に始まり、世界中のろう者に自信を与えたとも言える。そして、言語としての手話の再認識、ろう文化の認識が高まり、最近の言語学の本でも手話の章が入るようになった。日本では岩波講座言語の科学シリーズが初めてである(1997、今井)<sup>16</sup>。

## 7.5 今後の課題

黒人と白人でコミュニケーションスタイルが異なる(1994、カーチマン)<sup>17</sup>ように、ろう者、聴者とのコミュニケーションスタイルが異なることは以前から指摘されている(1983、川淵)。しかし、語彙の意味、その語用については全く研究されていなかった。

最近の日本手話学会でようやく指摘され、ろう者と聴者との間における差異が確認されている。手話を使っても口型が日本語そのものというケースが多く確認され、「いみ」「ある」「わかる」

<sup>12</sup>世界ろう者会議決議(1992)第11回世界ろう者会議報告書(世界ろう者会議)

<sup>13</sup>長谷川洋(1996)、「ろう文化宣言」、「ろう文化を語る」を呼んでの疑問(現代思想1996年4月臨時増刊号)

<sup>14</sup>斎藤道雄(1999)、もうひとつの手話(晶文社)

<sup>15</sup>A. ソロモン(1994)、Deaf is beautiful.:Definitely Deaf in New York Times Magazine, August 28, 1994

<sup>16</sup>今井邦彦(1997)、言語とは何か(岩波講座言語の科学第1巻言語の科学入門)

<sup>17</sup>トマス・カーチマン(1994)、即興の文化(新評論)

「オーバ」「むり」などの語彙が日本語の語彙とは異なる。これがろう者と聴者との間でのコミュニケーションのトラブルのもとにもなりがちである。また、ろう者は先に結論(仮説)を述べ、次に理由と過程を述べるといった話し方が多いなど、談話におけるスタイルにも特徴がある。ろう者の談話分析、スタイル分析について研究の余地があり、今後の研究成果が期待される場所である。ろう者の談話分析の研究と共に聴者の談話分析との比較研究も今後の研究課題であろう。